

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 17 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531009

研究課題名(和文) 道德教育における他者視点の内在化を育む幼小連携プログラムの策定

研究課題名(英文) Designing Cooperative Moral Education Programs for Infants which Nurture Intrinsic Realization of Other People's Perspectives

研究代表者

川崎 徳子 (Kawasaki, Tokuko)

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：00555708

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)： 幼児期から児童期初期における道德教育の連続性は、他者の視点を取り入れようとする自己の世界の拡張段階として統一的に捉えられると考える。本研究では、この時期の実践において、保育者・教師自身の道德観が子どもへの伝わり方に影響があることや、それには経験年数や保育環境の違いが関係することなどが示唆された。また、保育者の多くが、思いやりや相手を思うことなどを大事に考えており、かかわりの場面では互いの気持ちや思いを聞くなど、他者の視点を取り入れる援助を積極的に行っていることなどが示された。

研究成果の概要(英文)： It is thought that moral education through infancy and early schooling is continuous and uniformly accepted by children as part of the process of expanding their own world to accommodate the viewpoints of other people. This study suggests that the moral outlook of childcare workers and teachers has an influence on how morality is conveyed to children during this stage of development, and that there is also a relationship between this, a childcare worker's length of experience, and the childcare environment. Furthermore, many childcare workers think that compassion and consideration of others is important, and that after an altercation each child involved should listen to the feelings and thoughts of the other. This study also indicates that childcare workers play an active role in supporting children to accommodate the perspectives of other people.

研究分野： 幼児教育 保育学 乳幼児心理学

キーワード： 道德観 保育観 道德教育 保育所 幼稚園 他者の視点 内在化

1. 研究開始当初の背景

現代における様々な教育的課題への可能性を考えるにあたり、道徳教育の必要性や道徳心理学などへの関心は高まっている。しかし、教育実践の分野では連続的に系統立った道徳教育プログラムやその理念的背景が十分確立されているとは言えない状況にある。特に初期段階においては、発達心理学的知見に基づいたアプローチが必要であり、個人差も大きいことから、時間的展望を長く取った幼小連携の教育プログラムが重要であると考える。また、近年、幼小連携も視野に入れた幼保一体化の施策が進行中であるが、遊びを中心とした幼児期の教育は、体験を重視する一方で、教育プログラムのプラットフォームを形成するということは難しい。しかしながら、価値観の多様化した社会では、柔軟な教育実践と、それを貫く統一的な子ども観、保育観、社会観やルール・規範等が精練される必要があるだろう。例えばスウェーデンでは、1998年以降導入された国レベルでの就学前保育の教育課程により、多様な形態を取りながらも一貫して質の高い保育が維持されていると評価されており、日本の制度改革も学ぶことが多いと考えられる。

また、保育観については、近年、ベルギーのラーバースを中心に、保育の質の評価についての研究が進んでおり(秋田他、2009)、「安心と夢中」が保育観のキーワードにされている。この視点は、小学校教育でも重要な要素であり、小学校ではこれに加えて徐々に社会性や道徳的観点が要求されていくと考えられる。児童の道徳教育については、Turiel(1983)や森川(2009)などのものがあるが、いずれも小学児童以降のモデルであり、小学校以前の幼児期のプログラムとは理論的にも実践的にも繋がりが見えにくい。

本研究では、道徳教育の連続性は、他者の視点を取り入れようとする自己の世界の拡張段階として、統一的に捉えられると考える。

ベルギーモデルの「安心と夢中」の段階は自己の形成の基盤であり、この基盤の上になつて、他者との関係形成段階がもたらされると考えられる。次の段階は、「自分の安心と夢中」が、「他者の安心と夢中の保証」と一体化することで、共に遊ぶ他者の視点を取り入れ、社会性(共有と交換)が芽生える。さらにその次に他者を別人格と認めた上での社会性(交渉と調整)へと進む。園児や児童にとって、このプロセスは自発的に行われる必要があるが、他者との関わりの中にも含まれる道徳的レディネスは、遊びを誘発する教材の開発などによってその環境を整えておくことが可能であると考え研究を計画した。

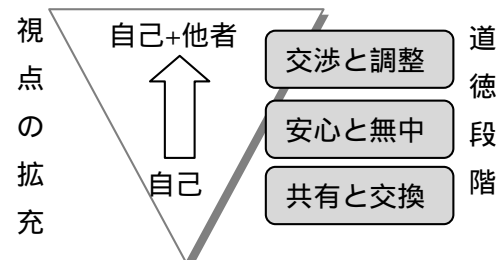


図1: 幼小連携の視点からみた道徳概念の発達モデル

2. 研究の目的

本研究では、他者視点の獲得期にあたる幼児期から児童期初期に焦点化し、(1)道徳観の発達とそれに対応する教育(保育)観についての論点整理・統合、(2)道徳的レディネスを育む教育実践と、(3)幼小連携のプログラムの施行・評価からなる包括的モデルの開発、の3つの方向から、道徳教育における幼小連携を目指した実践的プログラムの策定と評価の検討を目的とした。

3. 研究の方法

3つのサブカテゴリごとに具体的テーマを設け、研究を進めた。

(1) 保育観検証プログラム〔保育・教育現場の参与観察・聞き取り調査による現状把握、道徳的保育観、日本的道徳観の発達についての資料研究、国内外の先行研究に基づく道徳教育の論点整理〕(2) 道徳教育実践プログ

ラム〔日本における道德教育の教材研究、幼稚園における小学校における道德レディネスを育む教材の開発のための検討〕(3) 幼小連携プログラム〔他者視点の内在化プロセスの評価尺度作成のための検討〕

4. 研究成果

本研究では、道德教育の連続性は、他者の視点を取り入れようとする自己の世界の拡張段階として統一的に捉えられると考え、近年の道德教育への期待や可能性、幼小連携の視点も含めて検討を行った。

研究期間の中で、保育観検証、道德教育実践、幼小連携の3つの視点から研究者それぞれの専門分野から、幼児期から児童期における道德教育の実践現場へアプローチし、課題に迫った。研究を進める中で、幼児教育と小学校以降の実践現場における道德教育は、保育者、教師の道德観、教育観の影響が大きく、それ自体に課題が含まれていることが見えてきた。特に幼児期の教育は遊びを中心とした総合的な指導を行う上で生活を基盤とした体験を重視することから、保育者・教師の個性が反映されやすいことが明らかになった。また、重点的に現在の乳幼児の教育制度の変革期における保育所、幼稚園の保育実践の現状を道德的視点も含めて捉えなおし、幼児教育に携わる保育者に重点を置いて、幼小連携への可能性も含めてまとめた。

(1) 道德教育かかわる保育実践の現状

保育という営みにおいての道德的な面の教育は、幼稚園教育要領(H20年改正、文部科学省)や保育所保育指針(H20、厚生労働省告示)にも示されるように、幼児期の子どもの発達の特性を大事にしながら、園の生活の中で、遊びを通して、また、人とのかかわりを重ねながら道德性の芽生えが培われることを目指している。保育者は、子どもたちが遊びを通して十分に自分を発揮すると共に、葛藤やつまずきなどを体験し、それらを乗り越えることによって、他者の存在に気付き、相手

を尊重する気持ちや人に対する信頼感、思いやりなどが次第に芽生えてくるように、環境を整え援助を考える。しかし、実際には、幼稚園、保育所、認定子ども園など、様々な種類の保育施設が存在しており、それぞれの役割や置かれた環境のもとで、保育者は試行錯誤しながら創造と工夫の日々を送っている。

こうした実践の場では、保育者が、子どもにどんなことをねがい、成長をどのように見通しながらかかわっているかなど、保育者自身の道德観や保育観と保育との関係について、「子どもの道德心」をキーワードにして、質問紙調査を行い、保育実践を振り返り、考えるための手がかりを得ることを試み考察した。

<調査方法>

Y県内の保育所、幼稚園へアンケートを郵送。調査期間は2013年12月～2014年2月。保育所の回答数132件(有効回答率60.0%)、幼稚園の回答数は351件(有効回答数52.7%)

<質問紙について>

子どもの道德心に関する項目¹、例えば「困っている人がいたら助ける」「どんな友達にも平等に接する」など、25の質問項目について、問1「子どもにとってどの程度重要と思うか」、問2「子どもにどの程度伝わっていると思うか」の2つの質問をして、それぞれ5段階で評定してもらった。また、問3として、保育の実践の中で、保育者が子どもに対するねがいをどのようにもっているかということと、問4として、保育の中での子ども同士の衝突する状況や葛藤の起こる場面で子どもにどんなことを伝えたいと思っているかということについて、自由記述で尋ねた。

<結果と考察>

保育者自身の道德観と子どもへの伝わり方への影響についての関係の検討

¹ 幼稚園教育要領解説(H20、文部科学省)、保育所保育指針解説(H20、厚生労働省)、小学校学習指導要領(H20、文部科学省)他、道德教育に関する資料より道德的内容項目を抽出整理し、質問項目として25項目にまとめた。

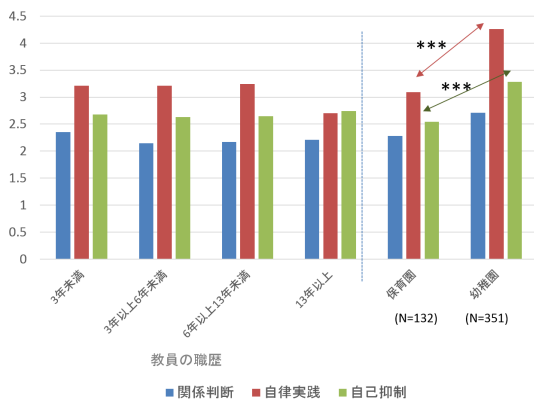


図2：保育者の道徳観と子どもへの伝わり方への影響

問1、2の結果について、因子分析²という統計処理を用いて整理すると、「関係判断因子」「自律実践因子」「自己抑制因子」の3つの影響のある因子に分類することができた。さらに回帰分析³という処理を行い、変数間関係を検討し、以下のような結果が得られた。

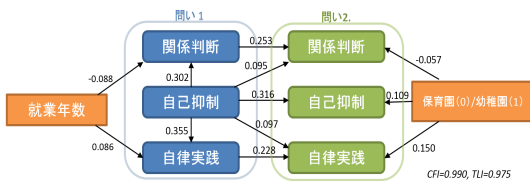


図3：保育者自身の道徳観と子どもへの伝わり方の関係

問1から受け取れる保育者自身の道徳観と問2の子どもへの伝わり方の関係を見ると、保育者自身の道徳観と子どもへの伝わり方への影響についての関係や、保育所、幼稚園という保育の環境における違いと、保育者の経験年数との関係などが見えてきた。例えば、自分と周囲との関係についての道徳観を示す項目「関係判断因子」や、みんなのために自分のやりたいことを我慢するなどの項目「自己抑制因子」は、保育者の経験年数による影響はそれほど見られないが、勤務年数が

²因子分析とは、項目の背後にある見えない要因を探り出す統計技術の1つ。この手法を使うと、多くの項目が少数の因子（潜在変数）にまとめることができる。心理学における「性格」や「能力」もこの手法で測定することができる。

³回帰分析とは、ある変数が別の変数を説明・予測する強さを見つける統計技術の1つである。例えば、親の身長から子供の身長を予測する、といったことができるようになる。そのためには多くのデータが必要で、言い換えれば全体的な傾向としての、変数間関係を表す関数の係数を見つけること、といえる。

13年以上になると、「自分とは違う考えの友達でも大事にする」「相手を思いやる」などの「自律実践的な判断の因子」が低いことが受け取れる。このことから、勤務年数を重ね経験を積んだ保育者は、道徳的な判断について、子どもに直接伝えるという方法ではなく、子どもに考えさせたり、子ども自身の判断にゆだねたりする余裕あるのではないかと推測された。

また、保育所と幼稚園とを並べてみると、3つの項目すべてにおいて、幼稚園の数値が高いことを受け取れる。これらのことから、一日の生活に重きが置かれる保育所と、遊びの場面が主となる幼稚園という生活や環境の違いは、保育者自身の意識の持ち方や子どもへの伝わり方にも影響するのではないかと考えられる。また、保育所と幼稚園における環境や生活の流れなどの違いは、保育者自身は同じような道徳観をもっている、実際の保育の場面での保育者の意識やかかわり方に影響を与える可能性があるかもしれない。さらに保育者の経験年数の違いも、子どもへの道徳心を育む保育実践に何らかの違いをもたらすことなどが捉えられた。

保育者の道徳観と教育実践との関係についての検討

問3、4の結果について、文章による回答について、自由記述の言葉がもつニュアンスを大事にする方法として、テキストマイニング⁴という手法を採用し、分析した。

図4、5は、円の大きいものほど、出現頻度の多い言葉や内容であるということを表し、統計的に同じグループに分類されるもの

⁴ テキストマイニングとは、自由記述などで得られたテキストを統計的に処理する手法。自由記述に含まれるキーワードを機械的に抽出し（形態素解析といいます）、同時に使われることの多いキーワードを数え上げることで、キーワード同士の結びつきの強さを表現する（共頻関係といいます）。このキーワード同士の関係の強さを統計的に処理することで、似たキーワードをグループにまとめたり、キーワードとキーワード、グループとグループの関係を図示したりするものである。

は同じ色にした。また、円同士をつなぐ線は、その関連の強さを現わしている。

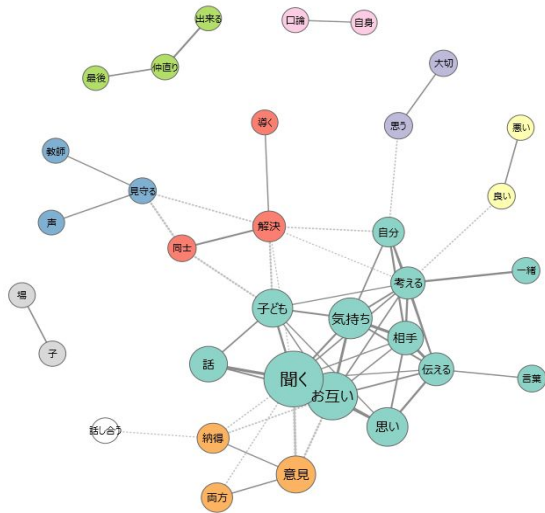


図4：子どもにはどんな大人になってもらいたいと思いつながりながら接しているか。

図4に示すように、子どもたちにはどんな大人になってほしいかという保育者のねがいで、思いやりや優しさ、相手を思う、気持ちを持つなどを大事に考えていることが受け取れる。また、これに繋がるように、考える、行動する、周囲、大切、意見、意思をもつことなどが挙げられている。別の所では生きる力や、判断、社会、常識等も大事にしてほしいと願っていることも見えてきた。

こうした結果から、保育者が子どもに対して、相手を思いやる気持ちなど、何よりも、自分以外の人に対して目を向け考える人になってほしいということをねがって子どもにかかわっていることが明らかになった。

図5に示すように、子ども同士が衝突する場面では、保育者は、何よりお互いの気持ちや思いを聞くことを大事にしながら関わっていることがわかる。そこから、相手に思いを伝えたり、自分で考えたりする場を持つことを大事にしていることが繋がってくる。

ほとんどの保育者が、こうした子どもの思いを受け止めるかかわりを一番に必要な援助としていることがわかる。そして、その結果として、両方が納得し、解決できることに繋がればよいと思っている姿が見えてきた。

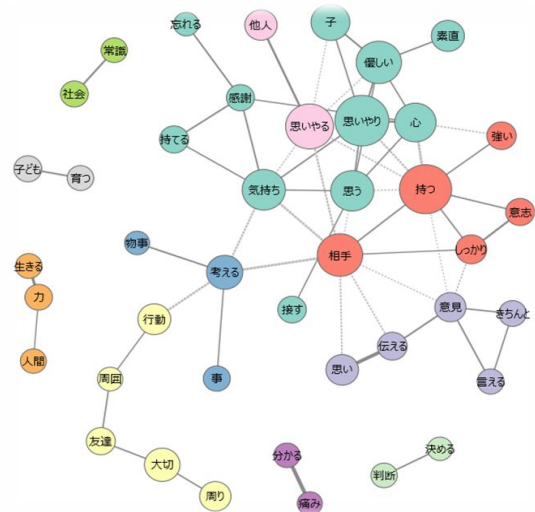


図5：子どもがけんかや口論をした場を収めるとき教師として最も大切にしていることは何か。

(2) イギリスの初等教育施設における教育実践から考える

2013年9月1週～2週 イギリスのピーターバラにある初等教育施設及び教員研修センター（Ravensthorpe Primary School、Peterborough Learning Partnership 他）等において、授業観察、教師へのインタビュー等を行い、幅広く日本の教育環境の現状について検討するための調査研究を行った。

地域性もあるが、イギリスの教育現場では、多様な個別的背景をもつ子どもを抱えており、現行の授業時間という枠組みの中で道徳的な心情を考えることに加え、ハウス組織が存在し、学校の授業時間外で異年齢など様々な個別要素の違う児童生徒が、長期間の安定した生活体験をベースとして結びつき、生活時間を共に過ごしなが、子ども社会の中の序列と倫理、道徳心を育成する効果もたらされていることが捉えられた。(発表検討中)

(3) 研究の成果と今後に向けて

本研究を通して、幼小連携の道徳教育プログラムの開発を検討する上で、主に保育者の側の道徳的な心情と実践の中の対応についてアプローチしてきた。その中で、道徳教育における保育者や教師の道徳観や保育観、幼児教育における遊ぶことや生活を重視した保育では、幼稚園と保育所、公立と私立と

いったその役割や特性が環境の違いを作り出しており、その中で保育者は道徳的な心情の伝え方にも苦慮している実態が見えてきた。また、子どもにとっては、集団生活の中では、他者との交渉、交換、調整など臨機応変に対応せざるを得ない個々の機会が、道徳的判断を必要とする体験をもたらし、子ども自身が道徳心を体系化する契機となっている様子が事例等からも明らかになってきた。

こうした、幼児期の生活経験の中での具体的な場面における道徳的教育の重要性に加え、海外の教育現場の実態から、生活体験を支える授業時間外の生活時間での道徳教育を育む環境の可能性を考えることも必要であるという着想も得られた。こうした異年齢、異集団との関係は、安心と夢中、共有と交換、交渉と調整といった場を保障し、他者の視点の内在化を促進すると考えられ、次の研究のステージ（課題番号 15K01756 基盤研究(C)「生活経験に基づいた実践的道徳教育」を導く教育環境モデルの開発と検証）へと引き継ぐものになっている。

引用文献

秋田喜代美他「子どもの経験から振り返る保育プロセス」2009 幼児教育映像制作委員会
Turiel、E. *The development of social knowledge : morality and convention* 1983 Cambridge University Press
森川敦子『社会的規範意識の育成と道徳教育』2009 溪水社

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

- 1 . 小杉考司、学校適応尺度 FIT の開発、山口大学教育学部研究論叢第 3 部、2015、p69-82、査読無
- 2 . 小杉考司・藤原武弘、社会的態度の三次元力場モデル 補間モデルの比較による検証、関西学院大学社会部紀要第 120 巻、2015、p125-131、査読無
- 3 . 遠藤野ゆり、存在を肯われること 自らを振り返る、形政第 126 巻、2015、P38-47、査読無
- 4 . 大塚類、身体と感情の関係についての現象学的一考察、教育人間科学部紀要第 4 巻、2013、p45-58、査読無
- 5 . 沖林洋平、CSCL と自己調整学習、山口大学教育学部研究論叢第 3 部第 61 巻、2013、p65-70、査読無

〔学会発表〕(計 39 件)

- 1 . Tokuko Kawasaki、Influence of Kindergarten teacher's morality on education programs.The 14th European Congress of Psychology、2015、7、7~10、Milano、Italiana.
- 2 . 大塚類、遠藤野ゆり、大人が子どもの<肩代わり>をすることの意味、人間性心理学会第 33 回大会、2014、10、12、南山大学 愛知県名古屋市
- 3 . Tokuko Kawasaki、Koji Kosugi、Noyuri Endo、Rui Ohtsuka、Surveillance study of teacher's morality、28th International Congress of Applied Psychology、2014、7、11 Paris、France.
- 4 . Koji Kosugi、Takuya Okamoto、Socaking for individual and Visualizing small group process(2)、28th International Congress of Applied Psychology、2014、7、11 Paris、France.
- 5 . 川崎徳子、子ども理解とここともち UK プライマリースクールのエピソードの考察、第 67 回日本保育学会 2014、5、18、大阪城南女子短期大学、大阪府大阪市

〔図書〕(計 5 件)

- 1 . 大塚類、遠藤野ゆり、大石英史、川崎徳子、磯崎祐介、エピソード教育臨床 生きづらさを描く質的研究、創元社、2014、P172
- 6 . 研究組織
(1)研究代表者
川崎 徳子 (Kawasaki Tokuko)
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号：00555708
(2)研究分担者
白石 敏行 (Shiraishi Toshiyuki)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：10259327
(3)沖林 洋平 (Okibayasi Yohei)
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号：20403595
(4)遠藤 野ゆり (Endo Noyuri)
法政大学・キャリアデザイン学部・准教授
研究者番号：20550932
(5)小杉 考司 (Kosugi Koji)
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号：60452629
(6)大塚 類 (Ohtuka Rui)
青山学院大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：20635867